セルフ・ライト・イデオロギー　――魔人転生記――

葵 大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セルフ・ライト・イデオロギー　――魔人転生記――

【Ｎコード】

Ｎ２５７１Ｚ

【作者名】

葵　大和

【あらすじ】

始まりは唐突に。何の脈絡もなく導かれた異世界で、青年は連続死亡記録を大幅に更新した。剣で斬りつけられ、光線で打ち抜かれ、拳に貫かれ。ようやく理不尽な死を免れた彼を拾い上げたのは――――最近よくある異世界転生モノです。割と勢いで書いているのでご都合主義万歳要素を含む事があります。時間潰しにでもお使いください。

1話　「理不尽は唐突に」

突然だけど、死亡フラグってあるだろ？

代表的な物を上げると「ここは俺に任せて先に行け！　後で必ず追いつく！」とか、「俺、この戦が終わったら結婚するんだ……」とかの事だよ。他にも色々類型はあるだろうけど、得てして似たような台詞だよね。

でもさ、俺思うんだ。

一番可哀想なのって死亡フラグすら立てられないまま突如として死ぬ奴だよな。

◆◆◆

いつものようにベッドに入り、明日も楽しい日になるといいなぁ、なんて楽観的な考えを巡らせながら目を閉じた所まではなんとなく覚えていたんだ――――

◆◆◆

次に目が覚めたら鬼のような形相をした鎧甲冑の男に斬り掛かられてました。

「この世から消えてなくなれ！　バケモノめ！」

凄まじい気迫です。でも正直訳が解らないのであんまり怖くありません。とても不思議です。眼の前の鎧甲冑のお方の剣がもう肩にめり込んでいてそろそろ心臓まで達しそうです。他人事みたいに「あぁ、俺ここで死ぬんだな」とか考えながら、どうせなら盛大に果ててやろうなどという意味不明な衝動が湧きおこってきたのでとり

あえず叫びました。

「イヤッホオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

――と。

◆◆◆

お次に目が覚めた時にはなにやら目の前に青白い光線が迫っていました。

「お前さえいなければ！　消えてなくなれ！　化物！」

ちょっと遠くに息も絶え絶えに叫ぶ軽装の男が見えました。そろそろ眼の前の光線が身体に衝突しそうです。さっきも言った通り訳が解らないのであんまり恐怖はありません。「あぁ、俺ここで死ぬんだな」と他人事のように――

「イヤッホオオオオオオオオオオオオオ！！」

――とりあえず叫びました。

◆◆◆

お次に目が覚めた時にはなにやら目の前に拳が迫っていました。

「お前は私が倒す！！塵となれ！　ば――」

「ふっざけんなあああああああああああ！！　ゴフゥ！！」

台詞を変えてみたけど駄目でした。めり込んでます、拳。もうそ

りゃぁ痛いです。たぶん腹部を突き抜けてます。まだ前の二つは良かった…一度目は心臓両断で即死、二度目は訳も解らないまま光に覆われて即死、でもこの三度目は頂けない。かなり痛い。
徐々に痛みが消えてきて妙に頭が澄んできた。いい加減腹が立ってきた。立つ腹がすっぽり拳大に抜け落ちてるんですけどね、現状。
嗚呼、勝手に瞼が下りてきたよ。

次目覚めた時にはまた死ぬ一歩手前なのだろうか。

◆◆◆

目が覚めました。正直何回目かも解りません。いちいち死ぬ様子を説明するのも無駄に思えてきた。

「嫌だあああああああああああ！！」

とりあえず叫びました。もう半ばやけくそです。これまでに一体何回死んだと思ってるんだ。

「■■■！」

しかし、どうやら今回は様子が違ったようです。
え？　もう死ななくてもいいの？
ひとえにその事だけが嬉しくて、現状を何も理解出来ぬまま、溢れ出る感動に身を任せた。

「うっ、うぐっ、うえっ」

我ながら、無様な泣き姿だと思う。きっと顔は泪と鼻水でぐちゃぐちゃになっているのだろう。

「■■■■？」

ひとしきり泣いた後、自分が置かれている状況を確認しようと首をもたげた。なんかすっごい動きづらいけど今は気にしないでおこう。

ふと視線を周りに巡らせると、人の顔が映った。

「■■■、■■……」

異様に血色の悪い青白い肌と、不気味な赤の瞳をした何者かが、口を開いて、何か言葉を紡いでいる。漠然と何か喋っているとだけ解る。男とも女とも見分けのつかない中性的な顔。青白い肌と真っ黒で艶やかな髪が強いコントラストを発している。

とりあえず『彼』と代名する事にした。

全く聞きとれないが、とりあえずこちらから何かアクションを起こしてみよう。そう思って再び俺は口を開いた。

「あうあうあー？」

……ん？

落ち着け、もう一度だ。

「あぶ？　あうあー？」

……。

そこから自分の置かれた状況を知るのは早かった。

なんともなく嫌な予感がして、咄嗟に腕を振り上げて自分の顔の前に持ってくる。腕が重い。

そして、自分の手を見て理解してしまった。

その手は赤子のように小さく、弱弱しかった。握れば潰れてしまいそうな小さな手。
意志の命令とズレた反応を示す声帯、口。

「■■？」

傍らでこちらを見ながら言葉を紡ぎ続けている何者かが、心配そうな顔でこちらを見て来た。

「オギャア」

気持ち悪い言葉が出ました。くそっ、気合いが足りないのか！
ならばやってやる！　やってやるぞ！

「オゥギャア？」

もうしません。もっと気持ち悪くなったよ！
もう喋るものか。さっきは喋れたのに……　最初の叫びは一度きりの奇跡だったのか……　どうせならもっと有意義に使うべきだった！　今更遅いよね！
必死で心の中で明るく声を奮わせるが、しばしおいて、何とも言えない虚無感に襲われた。

赤子、そう、赤子。俺の躯は赤子そのものだった。

そんなことを考えていると、ふいに体を浮遊感が襲ってきた。視界が揺れる。
さっきまで傍らでこちらを見ていた何者かが、俺を抱き上げていた。
どこに連れて行かれるのだろうか。

でも、とりあえずは――――

死ななくて良いなら今はなんでもいいや。

一周して楽観的になる。この時ばかりは自分の精神力を称えてやりたくなった。

◆◆◆

時間がたつごとに俺の理性は落ち着きを取り戻していく。

考える、思考する、といった力が失われていない。赤子の躯と熟練された精神の差異に戸惑うが、かくあるモノなのだからとやかく言っても仕方あるまい。深く考えて無限思考のどツボにはまるよりは幾分マシだろう。解らないものは解らない。開き直れ、俺。

血色の悪い彼の腕に揺られて数十分。目に入る景色は鬱蒼とした木々ばかり。暗い。じめじめしてる。

それからさらに数十分して、ようやく視界に真新しい景色が入ってきた。

荘厳な城である。ちょっと心が高鳴った。

「■■■」

彼が何か言ってくる。ごめんね……　全く何言ってるか解らないよ……

でも、その親切心だけでもありがたい。親切心というより乳母心みたいな感じ？　これまでひたすらに罵倒されては殺されて、悪意をぶつけられては殺されて。そんな輪廻を巡ってきたから、もはやこの人の心配そうな表情だけで満腹です。

そんな事を考えていると、今度は抗う事すら躊躇われるレベルの

眠気に襲われた。微妙に揺られるのも相まって、わずか数秒で瞼が落ちる。
正直な所、睡眠というものが恐ろしかった。自分の躯が赤子であることを知っているから、睡眠が必要なのだろうと納得はできるが、何分ほんの少し前までは意識が途切れては目覚め、殺され、目覚め、殺されの繰り返しだったのだ。今意識を途切れさせてしまえば、次に目覚めた時にはまた理不尽な死と直面しているのではないか。
あぁ、でも無理、これには逆らえない。生理現象万歳。
最後の足掻きと腹を括って、意識の途切れる間際、口には出さず、心の中で呟いた。

もうどうにでもなれ――――

◆◆◆

次に目が覚めた時、真っ先に周囲を確認した。
結論から言えば、俺は巨大なベッドに寝かされていた。分相応にも程がある。でかすぎだろおい……
すると、視界の端から、ぬっ、と眠りに落ちる前に見ていた『彼』が姿を現した。
片手には分厚い本。俺が起きたことを確認すると、ぱらぱらとそれをめくり始めた。

「ア……ナタ……は、だ……れですか？」

なんと！　知ってる言葉だ！　あの分厚い本は翻訳書か何かかな？　……でもね、それを訊ねたところで俺に言葉を返す能力はないんだよ？　ちょっと頭の緩い人なのかな？　馬鹿、やめろ俺、せっかく必死で話しかけてくれたんだぞ。
自分を戒める。とはいえ、言葉を返せないというのは紛れもない

事実で、どうしようかと考えていると、再び彼が言葉を紡いだ。

「……ごめ……んなさ……い。すこし……で……ことば……わかる、くる」

彼がしかめっ面で必死に手元の本に目を走らせ、再び声を発した。片言だが、恐らく俺が理解出来る言語を使える誰かが来てくれるのだろうとは理解できた。運が向いてきた。これで一方通行的にではあるが情報を得られる。

嬉しくなって身体に力を入れて動きまわってみた。

彼は俺がベッドの上を高速で転げまわる様を見て、嬉しそうに微笑んだ。中性的な美貌に優しげな微笑。血色の悪い真っ白な肌も一片の汚れのないキャンパスのように見えて、つい見惚れてしまう。

とにかく、彼の言う人物を待つことにしよう。それまでにある程度身体を制御できるように努めて、言葉ではなく動きで反応を示せるように練習しよう。うん、それがいい。

◆◆◆

彼のいう人物はそれからほどなくして俺の視界に現れた。彼と同じような異様に真っ白な肌と、真っ赤な眼。その人物は一見して男だと解った。隆起する筋肉群がことさらに男であることを主張してくる。

「初めまして。気分はどうだい？」

言葉づかいは丁寧だった。

俺はその短い言葉を受けて、ベッドの上で右に一回転した。フフフ、これがこの短時間で俺が得た能力の一つ。右に一回転で肯定！左に一回転で否定！　完璧！　……なわけねえだろおおおおお！

これくらいしか思いつかなかったんだよぉおお！　頼む！　なんとかこっちの意志を汲み取ってくれ！　利発そうなお兄さん！

「うん？　あぁ、君は喋れないのか。どうも赤子と関わり慣れていないから失念してしまったよ」

もう一回右に一回転。

「右に回転すると肯定……かな？」

マジパネェ。このお兄さんマジパネェ。天才と称しても良い。察しが良いとかそういう次元を軽く二秒で超えてった。

よし、ここで右にもう一回転すれば完ぺきだ。

「はは、やっぱりそうか。解ったよ。それにしても、意志は明確なのに喋れないっていうのはもどかしいね。赤子ってみんなそうなのかな？」

いやいや、それは無いと思うよ……

「まずは自己紹介から。僕の名前は《アルフレッド・サターナ》。そして君を拾ってきた『彼女』は《リリアン・サターナ》」

彼女？　女だったのか。彼と呼んでいたことを心の中で詫びておこう。

「彼女の話だと、君は僕達の国の領地に落ちていたらしい。■■■、■■？」

「■■。■■■■」

アルフレッドは別の言語でリリアンと喋った。
それにしても、落ちていたとはどういう了見なのか。
あともう一つ、名前で気付いた。

俺は俺の名前が解らない。

あったような気もする。何度も何度も殺される段階で、記憶が壊れてしまったのか。

「――それで、放っておくのも忍びないからリリアンが連れて来たらしい」

名前、なんだっけなぁ。
だめだ、絶対に思い出せない気がする。忘れているとか、思い出せないだけって感じじゃない。
無い。

「辛そうだけど大丈夫？　――安心して。僕達は君を捨てたりしないから。連れて来たからには君が成長するのを助けよう」

ありがたい。人の良心ってのに久々に触れた気がする。

「さしあたって、とりあえずは君が僕達と十分に話せるよう、僕が言葉を教えよう。食べ物も与える。さぁ、疲れただろう。君は安心して眠るといいよ」

アルフレッドが柔和な微笑みを見せた。
その微笑みに釣られるように、俺は一度だけ顔をしわくちゃにしながら笑って。再び瞼を閉じた。
いつかのベッドの中で呟いていたように、それでも、今度ばかり

は心から――――

明日は楽しい日になっていたらいいなぁ――――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2571z/

セルフ・ライト・イデオロギー　――魔人転生記――

2011年12月9日02時11分発行